

第 1 部

総 説

第 1 部 総 説

1、調査の背景と目的

知床国立公園は、日本の「戦後」は終わったといわれ地域経済振興としての観光ブームが始まった昭和30年代に、南アルプス、白山、山陰海岸と共に国立公園候補地として審議され、昭和39年6月1日に指定された。

他の候補地がどちらかといえば高度経済成長期における観光開発の期待を担って地元の陳情運動を背景として進められた状況とは異なり、知床の場合は当初から「原始的な自然環境の保全」が指定目的として明確に打ち出されており、現在本公園面積38,633haの全てが特別地域に指定され、その約60%が最も規制の厳しい特別保護地区として厳正に保護されている。

しかしながら、昭和60年代前半までは、土地利用、地域産業との調整の下に昭和60年頃までは森林施業、伐採が行われていたところであるが、「知床騒動」として全国の耳目を集めた知床国立公園内の国有林伐採問題を経て、国有林当局による「知床森林生態系保護地域」の設定（平成2年）がなされ、公園面積の7割を占める国有林において森林施業の凍結が行われることとなった。。

また、平成年代になると自然保護に関する各種の施策（「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の制定（平成3年）「生物多様性条約」の発効（平成5年））が打ち出され、従来の視覚的な美しさだけでなく、動植物全体を含めた多様な生態系が国立公園の風致景観の構成要素として重要視されるようになった。

このような情勢を踏まえ、平成7年2月に地種区分の格上げを主とした公園計画の変更がなされ、ルシャ、テッパンベツ川流域の、従来第3種特別地域であった4,025haが特別保護地区に格上され、指定当初の主目的であった「原始的な自然環境の保全」に向かって新たな第一歩が始まったところである。

格上された区域は、昭和40年代まで一部で択伐による森林施業が行われていたが、昭和48年には終了し、以来20数年を経過した現在、森林景観は順調に回復しつつあるように見える。また、天然のエゾマツ、トドマツの針葉樹をはじめ、ミズナラ、ダケカンバ、ハルニレ等の広葉樹の大径木が残存しており、海岸部から高山帯まで連続した自然植生がみられ、すぐれた森林生態系が保持されている地域といわれている。

また、シマフクロウ、オジロワシ、クマガラなどの天然記念物指定鳥類の生息も確認されており、ヒグマの生息密度は知床でも最も高い地域といわれている。

さらに、50～100メートルの海蝕断崖が連なる知床半島西岸においては、直接滝となって海に流れ込む河川が多い中、本地域の海岸部は比較的緩傾斜地が広がり、河川勾配の緩やかなルシャ、テッパンベツ両河川へはサケマス科魚類の自然遡上が多く見られるな

ど、河川生態系も良好に保存されている。

このように本地域は、海岸の波打ち際から半島脊稜部の高山帯・亜高山帯に至るまで連続的に原始性の高い植生環境が残り、また、サケマス類を基盤とする食物連鎖が顕著に見られ、これの頂点に位置するヒグマ、シマフクロウ、オジロワシなどの生息を可能にしており、当該地区は知床半島においても唯一の地域であり、わが国でも極めて貴重で多様な自然生態系地域であるといえよう。

本調査は、わが国の中で自然植生の占める割合が最も高い北海道にあっても、特に生物多様性保全の観点から森林・河川を中心とした良好な自然生態系が維持されているといわれる本地域において、生物の多様性等の現況を調査・整理し、この地域のすぐれた自然景観と生態系を将来にわたり保全するための基礎的な資料を収集・把握しようとするものである。

(写真－１) 調査対象区域全景



2、調査の概要

本調査地は冬期・積雪期の立入が不能の地であり、調査期間が短く、現地調査は限定されたものとならざるをえなかった。

[現地調査の項目]

(1) 植物調査について

- ・植物相の調査——植生図の作成、植生タイプの面積割合の解析
- ・ギャップ（林冠欠損部）動態・萌芽特性の調査——林分修復過程の解析
- ・針広混交林の林分構造の調査——極相林の種の多様性の解析

(2) 動物調査について

- ・小型哺乳類——捕獲調査
- ・大型哺乳類——痕跡調査、ライトセンサス
- ・一般鳥類——ラインセンサス
- ・大型猛禽類——定点調査

(3) 景観・地形について

ラジコンヘリコプターによる航空撮影を行い、調査地域全体の把握、景観写真の収集を行った。

[現地調査日程]

- 8月7～9日 景観撮影調査、鳥類調査
- 8月21～23日 植物調査
- 9月15～23日 植物調査
- 9月27～29日 景観撮影調査、鳥類調査
- 10月18～20日 哺乳類・鳥類調査
- 11月8～10日 哺乳類・鳥類調査
- 11月18～23日 哺乳類・鳥類調査

[調査者]

- ・植物調査 渡辺展之（北海道大学自然保護研究会代表）
- ・動物調査
 - 哺乳類 島田明英（自然ウォッチングセンター代表）
 - 鳥類 齋藤慶輔（（社）北海道野生生物保護公社研究員 獣医師）
- ・景観調査 武田秀樹（北電興業株式会社課長代理）
- ・統括 二橋愛次郎（北電興業株式会社次長・技術士（環境部門））

3、調査対象地域の概要

[立地]

知床半島は、北海道の東北端に位置し、北西はオホーツク海に面し、南東は根室海峡を隔てて国後島に相對している。

北緯43度50分から44度20分、東経 144度45分から 145度20分に位置し、長さ65キロメートル、幅25キロメートルほどの細長い半島である。

半島の中央部を、最高峰の羅臼岳（1660.7m）をはじめ1300mを越す山々が連なり、この山脈を境に、西側が網走支庁の斜里町、東側は根室支庁の羅臼町の行政区域となっている。

本調査の対象地域は、この半島の突端、知床岬に近く、硫黄山から知床岳に至る稜線の西側で、ルシャ、テッパンベツの二河川流域を中心とした約5000ヘクタールの区域である。（図－1）

[地形・地質]

本地域の地形は、硫黄山と知床岳の火山体の間にあって、半島の脊稜山脈の最低鞍部標高約 300mの「ルシャ・ルサ越」を中心にオホーツク海に向け扇状に広がっており、硫黄山、知床岳の山体にかかる部分を除き比較的緩傾斜である。したがって域内の河川は、短小急流の多い半島にあって、比較的緩やかで長大である。

地質は、半島の基盤を構成する新第三紀層を第四紀洪積世の火山噴出物が覆い、普通輝石＝紫蘇輝石安山岩の溶岩流及び同質の集塊岩、碎屑岩からなっている。

なお、海岸部は洪積世に堆積した砂・礫層からなっている。

[法指定区域等]

・自然公園

知床国立公園は前述のとおり昭和39年6月1日に我が国で24番目の国立公園として指定され、また、本調査の対象地域は平成7年2月21日付けで第3種特別地域から特別保護地区に保護規制計画の強化が図られている。（図－1）

・鳥獣保護区

本調査区域を含む知床半島の遠音別岳北東麓から知床岬までの62,529ヘクタールが国設鳥獣保護区・特別保護地区に指定されている。（図－2）

・国内希少野生動植物種

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づき指定されている

国内希少野生動植物種の鳥類のうち、知床半島で観察された種は以下の9種である。

わしたか 科 オオタカ・オジロワシ・オオワシ・クマタカ

はやぶさ 科 ハヤブサ

つ る 科 タンチョウ

うみすずめ科 エトピリカ・ウミガラス

ふくろう 科 シマフクロウ

(知床半島自然生態系総合調査報告書(動物篇)1981北海道)

このうち、本調査の対象区域においては、今回以下の6種が確認された。

わしたか科 オオタカ・オジロワシ・オオワシ・クマタカ

はやぶさ科 ハヤブサ

ふくろう科 シマフクロウ

・天然記念物

本調査区域においては、文化財保護法に基づく国指定天然記念物のオジロワシ(昭和45指定)、エゾシマフクロウ(昭和46指定)、クマゲラ(昭和40指定)の生息繁殖が確認されており、また、天然記念物のオオワシ(昭和45指定)の季節的飛来が確認されている。

・保安林等

本調査区域の国有林は、山腹部は土砂流出防備林に、また、海岸部は潮害防備林に指定されている。

また、本調査区域を含む知床横断道路周辺以東の半島部国有林(35,527ha)が、平成2年4月25日付けで「知床森林生態系保護地域」として設定されている。(図-3)

[社会環境]

知床半島には古くから人が住んでいたことが遺跡の発掘調査の結果判明している。

最も古いものとしては、ウトロの北東を流れる幌別川河口の右岸段丘から7~8000年前の縄文時代初期の貝殻文土器が出土し、さらに続縄文文化(西暦0~700年頃)、その後のオホーツク文化(西暦800~1100年頃)の遺跡が半島各地で見られ、平安時代末から鎌倉時代初頭の擦文文化を経て、以後アイヌの人々が半島一帯に居住するようになった。江戸時代には知床岬、ルシャ、ウトロなどにアイヌの集落があったことが知られて、また、和人の入植・定着も始まり、明治の初めまではニシン・サケマスを対象とした漁業が行われていた。

半島部の岩尾別に農業開拓が入ったのは大正3年になってからであるが、この入植はバッタの大発生などの悪条件により大正14年には全戸離農している。

その後、岩尾別の離農地には戦中・戦後に再度入植開墾がなされたが、種々の悪条件により昭和40年にはほとんどが離農放棄されている。

知床半島の産業の中心は、定置網によるサケマス漁を主体とする漁業である。イタシュベツ川河口から知床岬にかけて20か所の定置網漁の番屋が設置されており、本地域に隣接する滝沢河口部海岸には番屋が1か所存在している。（写真－2）

なお、ルシャ川にはサケ・マス増殖用親魚の捕獲施設が設けられている。（孵化放流事業の縮小のため、平成7年度は稼働していない。）（写真－3）

知床国立公園区域（38,600ha）の土地所有は、幌別・岩尾別地区の約1,300ヘクタール（大蔵省所管地100ha、斜里町有地700ha、開拓跡民地等500ha）及び本地域内の約1,200ヘクタール（三井農林株式会社所有林）を除いた、約9割（93～94%）が国有林である。

（写真－2）定置網番屋



（写真－3）サケマス増殖施設

